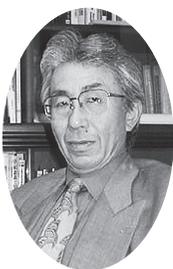


巻頭言



21世紀の公共政策

日本公共政策学会 会長

足立 幸男

適切な公共政策を発見しようと思えば、公共政策によって対処しようとする当の問題に徹底した分析を加えること、その原因を正確に把握することが不可欠である。この点で、問題がもっぱら「市場の失敗」に起因するのか、「政府の失敗」に起因するのか、あるいはその両方が関係しているのかを検討することは、きわめて有益であろう。

問題の分析に続いて政策案を設計することになるが、この段階では高いレベルの政策構想力——抽象的な政策アイデアを形あるもの（具体的な処方箋）にする能力——が要求される。もとより、この種の能力は一朝一夕で身につくような代物ではない。その確実な修得を可能にする方法をマニュアル化することもできそうにない。ディシプリンとしての公共政策学にできることは、せいぜいのところ、それに留意して政策設計を行えば致命的なミスだけは犯さずに済む、そのような基準ないしガイドラインを定式化することくらいであろう。そのような基準として最も重要であると思われるのは、有効性、費用対効果、実行可能性（実施の容易性・困難性）、不確実性への十分な備えの4つである。

「慎慮」（プルーデンス）の美德に属するこれら4つの要件を満たすことは、しかしながら、「よい」公共政策の必要条件であっても十分条件ではない。「よい」公共政策は同時にまた倫理的なもの、倫理原則に叶ったものでもなければならぬ。ある政策が倫理的であるか否か、どの程度そうであるかを、われわれはどのようにして判定することができるのか。

それ自体として「不正」であるような手段によってしか達成できそうにない事柄を目的とする政策や、それ自体として「不正」であるような事柄を目的とする公共政策は、疑いもなく倫理に悖る。また、その実施が結果として政治社会をよりよいものにするとは考えられような公共政策も、倫理的であるとは言い難い。だが、ある政策目的や政策手段を正あるいは不正であると判定するとき、われわれはある特定の公共哲学——公共政策を通して実現すべき望ましい政治社会のありようについての哲学的信念——を拠りどころとしている。政治社会に生ずるさまざまな変化を改善あるいは改悪と評価するときも、まったく同様である。この意味で、公共政策学は価値自由な純然たる経験科学ないし実証科学ではありえない。公共哲学の研究をもその不可欠の一部とせざるを得ないのである。

第2次世界大戦の終結以降、自由民主主義諸国では、（新旧の）自由主義、社会民主主義をはじめとするさまざまな政治理念・政治運動が、国政の主導権を巡って激しい抗争を繰り広げてきた。だが、表層における対立の深淵には、広範なコンセンサスがあった。人類史を進歩・改良の

歴史とみなす進歩主義、科学・技術は人類に今以上の「幸福」（経済発展、アメニティー、安全、健康など）をもたらすという科学・技術信仰、政策消費者（有権者）の政治的選好を所与としその最大限の充足を図る点にこそ公共政策の至上命令ないし究極目的があるという「消費者」主権が、広く共有されていたのである。政治的対立は畢竟、このコンセンサスを実現するための手順や政治制度のあり方——たとえば、政府、市場、NPO・NGOの各々にいかなる役割を配分するか——や、科学・技術の発展が可能にする「幸福」の分配方式などを巡ってのものでしかなかった。たしかに、人口爆発、環境破壊、原子力エネルギーの危険性などが深刻な政治・社会問題として認知されるようになった1970年代以降、科学・技術文明の行く末と人類社会の将来に漠とした不安感を表明する人々の数は疑いもなく増えた。とはいえ、進歩主義、科学・技術信仰、「消費者」主権を主要な構成要素とするこの公共哲学は、いくぶん綻びを見せ始めたとはいえ、依然としてオーソドキシシーとしての地位を失ってはいない。

20世紀とりわけ第2次世界大戦後における科学・技術の飛躍的発展によって、人類は途方もなく巨大な、驚異的なほどに広く長く深い射程を有する力を獲得した。かつて自然に対する人間の働きかけ——即ち、テクネ（技術）の領域——は自然の表層に一時的な攪乱をもたらすにすぎず、致命的なダメージを自然に与えるほどの破壊力をもってはいなかった。だからこそ、小さく儂い人間の営みを大いなる自然と対比し、自然の猛威から人間の営為を防御するための手段としてテクネを賛美することも許された。ヨナス（Hans Jonas）も言うように、責任が問われたのは人間自身がつくりだした世界のうちにおいてであり、自然は人間の責任の対象ではなかった。だが、いまや自然と人間の関係は大きく変わってしまった。自然は人間の意のままに改変され利用・搾取される惨めな存在にまで貶められてしまった。加えて、現代の科学・技術は人間存在それ自体をすら操作・改造の対象とするに至った（生と死に関わる先端医療、遺伝子操作、化学薬品による心理療法などを考えよ！）。それどころか、人類の生存それ自体をさえ脅かしかねない力をわれわれは手にしてしまった。これほどまでに強大な力を獲得してしまった以上、われわれ現代人はその力に見合うだけのより重大な責任をもちや逃れることはできない。そして、その責任を公共哲学の核心部分に据えるのでなければならない。21世紀の公共政策は脱構築された公共哲学に基づいて構想されねばならないのである。